

●九州ブロック記念講演

平成16年9月15日(水) 福岡ガーデンパレス

九州の「ものづくり・ひとづくり」の在り方

藤井博信 九州経済産業局 総務企画部 企画課 課長補佐



およそ1,300万人の人口を抱える九州の「経済力・経営規模」は、GDPで言えば44兆円ほどで、市場規模としてはオーストラリアやオランダ一国と匹敵し、当然、市場価値は高い。

技術的な分野においては、九州はその経済規模に比べ、研究開発の基盤や特許関係、民間の研究機関等が全国レベルで見ると少し弱い。ただ、九州には共同研究センターやインキュベーター機関が多いので、それらが補完している部分がかかなりあるのではないかと考えている。

アジアとの近接性という面では、特に中国や韓国への距離は非常に近い。

その東アジアは、実質GDPにおいて、アメリカやヨーロッパに伍する規模を持ち始めており、九州産業界はこのあたりをもっと上手に使う必要があるのではないかと考えている。

九州における輸出入額の推移を'92年と2002年で比較すると、特に中国や韓国、アセアン諸国の伸びが顕著である。中国3.8倍、アセアン2倍、韓国1.6倍と、九州に近い国々の輸出入額が増えてきている。

産学連携と産産連携の推進

その九州における課題だが、産学連携と「産産」連携をもっと推進していかないといけない。特に「域内調達率」が全国に比べて少し低く、自動車の場合、全国レベルは74.3%なのに対し、九州は55.3%に止まっている。この調達率が上がれば、九州経済はさらに活発化するのではないかと考えている。

産学連携について、様々な業種や規模の企業に尋ねてみたが、残念ながら

四分の一の企業からまだやるつもりはないという答えが返ってきている。

なぜまだなのかと言うと、「連携すべく企業や研究者がどこにいるのかわからない」「自社の技術に対する提携ニーズがちゃんとあるのかわからない」。このあたりをうまく補うような施策を考えていけば、連携は進むのではないかと考えている。

優れた熟練技能の活用を

自らが持つ技術の可能性、これをもっと高めていく試みも求められている。開発や設計、製造の分野に共通する課題だが、九州はやはり製造関係に高度な技術を持っている企業が多い。この高度な製造技術をさらに高めていくことで、企業の発展が見えてこないものかと考えている。

熟練技能の活用も課題の一つである。デジタル化が進んでくると、マシニングセンターの熟練技能はもう要らないのではないかと考える方もいるかもしれないが、私どもの調査では、21%の企業がかえって重要になると答えている。これは非常に当たり前のことで、マシニングセンターやNC機械は進化するものではなく、なかなかマニュアル化や機械化できない。そこで、熟練技能を持った人のノウハウが重要になってくる。優れた熟練技能を検証し、それを受け継ぎ、さらに活用することを考えていかないといけない。

ニーズ・オリエンテッドな研究開発への転換

新たな産学官の連携推進にも積極的に取り組んでいる。先にも述べたよう

に、多くの企業や大学において連携への前向きな姿勢は少ないが、実際には徐々に増えてきており、今後、産学連携は増えていく傾向にあるのではないかと考えている。

特に大学は独立法人化することで、研究開発費を国に頼るのでなく、ある程度自前で調達しなくてはならない部分が出てくる。この自前の部分を産学連携によって補っていったらどうだろうか。

産学連携の成果を上げていくためには、従来のような一人の教授の個人的なつながりではなく、組織的な連携が求められていくだろう。

教授一人による専門分野だけの研究開発だけでは企業が求める商品開発にはなかなか結びつかない。やはり産業界からのニーズに基づいての開発が、より成果あるものにつながっていくのではないかと考えている。

大学主導のニーズ・オリエンテッドな研究開発への転換が求められている。大学は産業界の知恵袋的なノウハウを提供し、産業界はそれを実践の場でどんどん活用することによって大きくなっていく、そういう無限の連鎖が必要ではないかと考えている。

具体的には、九州大学では包括的連携研究ということで、様々な業種の企業と連携をとっている。まさに企業のニーズに基づいて、大学のシーズを提供していく形をとっている。

大学との連携はどうしても理工学系になってしまう感じがあるが、経済学部との連携をとっている例もあり、いろいろな部分での産学連携の新しい形が生まれ始めている。